

# どこまでが「人間」？ どこまでが「もの」？

## 動物からの問い

中村美知夫

なかむら みちお / 京都大学野生動物研究センター、AA 研共同研究員

「人間」とそれ以外の「もの」という区分をするならば、動物は当然「それ以外」の側に入る。

だが、このような区分は本当に妥当なのだろうか？

野生チンパンジーの研究から「人間」というカテゴリーの限界を問う。

### 「私は何者か？」という問い

「私は何者か？」——誰もが一度は考えたことのある問いだろう。そして有史以来、諸学が追い求めてきた根源的な問いの一つでもある。

「少なくとも私は人間だ」——だが、そもそも人間とは何だろう？ 人間は「神」ではない。「獣」ではない。「植物」でもない。こうした人間ではない何か（＝非人間）と差別化することで、人間は人間自身を、ひいては「私」を、理解しようとして続けてきたのかもしれない。人間と「もの」との関係性を見るという本特集の趣旨もおそらくそうした問いと繋がっているはずだ。

まずは、ある日常の一コマからスタートしよう。

\*

イコチャとゾラという二人の母親が座っている。ゾラの2歳になる娘ゾルファはイコチャの後ろで砂遊びをしている。イコチャの胸には生後1ヶ月のイリスが抱かれている。

ゾルファはイコチャの前に回り込み、イコチャとゾラの間座ると、イコチャの胸にいるイリスをじっと覗き込む。

ゾルファがそおとイリスに手を伸ばすと、イコチャは優しくその手を取って遮る。そのままイコチャはその手でゾルファを軽くくすぐる。ゾラは静かにそれを見る。

ゾルファはイコチャの手と遊びながらもう一度イリスに顔を近づける。そして、ゾルファはイコチャの横で軽く足踏みをする。イコチャの後ろへ戻り、一人遊びを再開した。

\*

これは、タンザニアのマハレというところで、実際に生じたやり取りである。ただ、登場人物は人間ではない。私が研究を続けてきた野生のチンパンジーである（図1～5）。

イコチャやゾラといった名前が付いていることから分かるように、研究者はそれぞれの個体を識別していて、子供たちについてはいつ生まれたのかも分かっている。

### 動物は「もの」か

人間とそれ以外の「もの」という区別をするならば、チンパンジーは「もの」の側に入れられてしまう。当然チンパンジーは人間ではないからだ。西洋が起源であるほとんど全ての学問では、この区分は妥当である。人間は特別であるから、哲学や人類学、社会学といった文系の学問で論じられる対象である。人間以外の動物は「自然」の側に位置するので、理系の学問の対象である。そうした伝統的な枠組みでは、動物であるチンパンジーが「もの」の側に入ることに議論の余地はない。

しかし、である。

単純に「もの」の側にチンパンジー（やその他の動物）を入れてしまうことに私は違和感を覚えてしまう。上のようなやり取りは、たんなる「もの」と「もの」との相互作用なのだろうか。イコチャやゾルファが実際には人間だった場合、何か本質的に変わるものがあるのだろうか。

結論から言うと、私にはこのやり取りは極めて「社会的な」ものに思われる。そして、登場人物が人間であってもチンパンジーであっても、社会的な存在であるとい

う意味で本質的には大きな違いはない。そう私には思えるのだ。

### 人間は手つかず？

私の違和感は、一つには「人間」の側は手つかずのまま置いておいて、「もの」の側だけにさまざまな対象を入れて考えようとするあたりにあるのかもしれない。

言うまでもないが、人間はヒト（＝*Homo sapiens*）という動物の一種である。

ヒトの受精卵を想像してみよう。受精卵は、生物学的には完全なヒトである。それにはヒトの全ゲノムが含まれているし、正常に発生すれば完全なヒトの成体になる。受精卵であろうが、成体であろうが、生物学的な種としては等価であり、たんに発生の段階が異なるだけだ。

ただ、受精卵が人間として扱われているかという点必ずしもそうではない。それはたとえば、生殖医療において、受精卵を凍結保存してみたり、場合によっては廃棄したりすることから分かる。このような場合、受精卵は「もの」の側にあるのかもしれない。だから、必ずしも生物学的にヒトであることが人間の条件というわけではない。

もちろん、通常私たちが「人間」という場合には、生物学的なヒト以上のことを想定していることが多い。たとえば、言語や文化を持ち、理性的な存在——そういった存在こそ人間だと。この意味では、受精卵はどう考えても人間ではない。

では、生まれたばかりの赤ちゃんはどうか。赤ちゃんは言葉もしゃべらないし、まだその文化にも染まっていない、何か理性的な振る舞いができるわけでもない。だが、私たちは赤ちゃんを「もの」のように扱わない（少なくとも廃棄しようなどとはしない）。

なぜだろう？

それは、赤ちゃんがすでに「社会的な」存在だからだ。赤ちゃんであっても微笑むし、話しかければ何らかの反応を示す。しがみつく力を持っているし、おっぱいをあてがえば吸い付いてくる。つまり、赤ちゃんはいかに無力に見えようとも、すでに人間社会の網の目の中に位置付けられ、少なくとも一定の自律性を持った存在なのである。



図1 イコチャの後ろで、一人遊ぶゾルファ。



図2 ゾルファはついに我慢できなくなって、イリスを覗きにいく。イコチャはそれを見守っている。



図3 ゾルファがイリスに触ろうとして初めてイコチャはそれを制する。見るのはOKだが、触るのはダメということだろうか。ここではゾラが二人の様子を見ている。



図4 イコチャは制したその手でゾルファをくすぐる。ゾルファをあやすことで、ゾルファを全面否定はしない。



図5 イリスと遊ぶことを止められたのでゾルファは少し不満である。その不満がイコチャの横での足踏みに表れている。



### 日本霊長類学が目指したもの

チンパンジーやニホンザルなど、ヒト以外の霊長類（以下サルとしよう）を対象とした研究分野を霊長類学という。霊長類学が始まった当時は（ひょっとすると現在でも）、人間を他の動物とは切り離された特別なものと考えるのは至極当たり前だった。初期の日本霊長類学は、そうした考え方に疑義を呈した。霊長類学者たちは、たとえば、社会や文化、歴史といった、人間

だけのものと思われていた概念をサルにも仮定し、実際にそうしたものが存在することをサルの観察から明らかにしていった。

その際、それぞれのサルを一括して捉えず、個々に区別して、名前を付けた。サルと共感できると考え、擬人的な方法を採用することも敢えて避けなかった。

サルを人間と区別せずに扱うことには批判も多い。だが、敢えてサルを「もの（＝自然科学の対象）」の側に入れず、「人間（＝



図6 調査地であるタンザニアのマハレ山塊国立公園。

社会科学の対象)」の側に入れることで見えてきたことも多い。

たとえば、当初は、サルを個々に識別できるということに欧米の研究者は懐疑的であったという。人間が相手であれば普通にできることなのに、対象が人間以外であると、そんなことができるすら考えが及ばなかったのである。人間を自然とは切り離れた位置に置き、動物を「もの」の側に区分するという偏見がもたらした弊害だったのかもしれない。

現在では個体識別は世界的にスタンダードな方法となっている。つまり、欧米人であっても、普通にサルの識別ができる。実際に識別ができると、個々のサルに豊かな個性があることが明らかになる。社会は多様な個性を持った個体たちのやり取りから成り立っているから、この方法論上の変更は大きい。

### 「人間」を越えて

人間はある意味過度に社会的で、本来社会的な存在ではない「もの」をも社会的な存在として認めることすらある。一方で、人間をすら「もの」のように扱うこともできる。日々メディアを賑わす残虐な殺人事件の中には、人間がいかにか他の人間を「もの」のように扱うことができるのかを痛感させるような例も多い。

人間と「もの」との関係を見直すという作業をおこなう場合、「もの」の側にいろいろな対象を入れてみて、それら多様な「もの」と人間との関わりを見ていくという作業も重要である。だがむしろ、「人間」というカテゴリの不変性を疑い、「人間」を越えて人間性を理解することが今後よりいっそう重要になっていくのかもしれない。それは人間を貶めることではない。むしろ社会的な存在としての人間をよりよく理解していくことに繋がるはずだと私は思う。